

笑いの産出において参照される共有知識と関係性

Shared knowledge and relationships mobilized in the producing laughter

齋藤 巴菜, 坂井田 瑠衣
Hana Saito, Rui Sakaida

公立はこだて未来大学
Future University Hakodate
g3125003@fun.ac.jp

概要

本研究は、会話がなされていない共在状態において笑いがどのように産出されるのかを分析する。参加者が笑いうる出来事を理解する際に参照する資源として、互いのあいだで共有された知識や築かれている関係性に着目した。相互行為分析を通じて、笑いは共在経験や個人の習慣に関する知識、日常的前提からの逸脱性を通じて見出され、参加者間の関係性や相互志向性ととも組織されていることが明らかとなった。

キーワード：笑い (laughter), 共有知識 (shared knowledge), 関係性 (relationship), 相互行為分析 (interaction analysis)

1. はじめに

旧来の認知科学研究では、認知は個人の中に閉ざされたものとして扱われる傾向があったが、近年では、行為は状況に応じて即興的に組織されるという状況論的アプローチが広まりつつあり、人間の認知は他者との相互行為や環境との関係の中で形成されるという見方がなされるようになった (Suchman, 1987)。

状況論的見方が広まるなか、笑いも、次第に従来の生理的現象から、相互行為の中で組織される社会的行為 (Glenn, 2003; Goffman, 1961; Jefferson, 1979) として捉えられるようになりつつある。そこで本研究では、笑いが具体的な対面相互行為場面でどのように利用されているのかを分析する。

対面相互行為における笑いには、発話者による誘い笑い (Jefferson, 1978) や、笑うべき発話 (laughable) に対する聞き手の笑い (Glenn, 2003) など、会話で産出される笑いに関する研究がほとんどである。本研究では、会話のなされていない共在場面で、笑いうる出来事 (laughable event) が起きたときに、相互行為参加者が産出する笑いに注目している。

齋藤・坂井田 (2023) では、対面の共在状況で会話をしていない状況において、ある参加者が産出した笑いに続けて他の参加者が即座に笑いを産出させるときには、笑いうる出来事への共同注意が達成されているこ

とが明らかになった。参加者らが笑いを連鎖させるためには、互いが同じことに志向しうることが何らかの方法で確かめられている必要があると考えられる。

それだけではなく、参加者らは、笑いうる出来事が起きたときに、その出来事に笑いで反応するべきかという相互行為上の課題への対処において、共在している他者とのあいだに、それが笑いうる出来事として理解できる程度の共有された知識があるか、その笑いを共有できる関係性があるかを参照していると考えられる。

以上のことから本研究の目的は、会話がなされていない共在状態において笑いが産出されるとき、参加者らは互いに共有されたどのような知識や関係性を相互行為資源として参照し、相互行為を組織しているのかを明らかにすることである。

笑いは、親密性や対人的距離を調整する機能をもつとされている (Glenn, 2003)。本研究の対象となる笑いも、関係構築や確認の契機として理解されうる。笑いが産出されるか否かは参加者間の関係性に依存しており、その関係性は笑いの前提として働くと同時に、笑い自体もまた関係性の構築・確認の契機に寄与しうる。本研究では、理解や意味づけの協働的過程を、非言語的な応答を通じて精緻に捉える手法として有効である相互行為分析を用いる。

2. 研究方法

研究対象

相互行為分析においては、観察対象が自然発生的な相互行為 (naturally occurring interaction) として立ち現れる事例を扱うことが重要である。本研究で観察する笑いが相互行為のなかで顕著に現れる場面として、私の所属大学で、私と同期大学院生らとのやりとりを研究対象とし、そのやりとりをビデオカメラで収録する。

相互行為分析においては、参加者の視点に立つことが重要である。それは、「人びとが何らかの情報や知識に注意を払っているときに、そのやりとりを十分に分

析するためには、研究者もまたそれらを知っている必要がある（串田・平本・林，2017）」ためである。この研究室で3年間を共にしてきた私と同期大学院生らは、実践共同体（community of practice）として位置づけられ、私自身もその内部に参加して関係性を築いてきた。したがって本研究は、参加者の視点に即した分析を可能とし、妥当な研究対象であるといえる。

分析方法

本研究では、研究対象の相互行為場面を収録した映像を用いて、相互行為分析（interaction analysis）を行なう。相互行為分析とは、相互行為の構造を、個別具体的な状況の発話や身体動作から記述的に捉える方法である（高梨・坂井田，2022）。参加者たちが行為を組織するために用いている、発話や身体動作、物理環境も含めて相互行為資源として統合的に分析対象とする。

3. 事例分析

3.1 事例1

2024年5月8日に収録された、齋藤と同期の大学院生である白石・長内・土屋との相互行為場面であるが、指導教員である高島も共在している。事例1の笑いうる出来事は、齋藤の習慣である本を嗅ぐ行為である。

1 齋藤 わあ(本をめくりながら)
>>本→
長内 >>PC→
白石 >>齋藤の持つ本→
土屋 >>やや右前にある本→
2 齋藤 (2.0)&(0.7)\$*(1.1)&(1.8)&(0.6)&(.)+(0.2)%(0.2)
&顔少し下げる&——&本を開きながら顔に近づける
&本のおいをおいを嗅ぐ→
&正面やや下向き→
白石 \$左手の手元にある本を左手で触る→
*手元の本→
長内 @齋藤を素早く2度見する→
%齋藤→
3 齋藤 &(0.3)+%(0.3)%(0.2)&(0.2)@(.)+%\$(.)
&ページを開いたまま腕をテーブルに下ろし
顔から本を離す→&
+長内——+本→>
+PC——%齋藤——%PC→
長内 @頬杖をついている左手下ろす(上体がやや起きる)
白石 \$右腕で頬杖をつき左肩が開くように姿勢を
変え、顔は齋藤らのほうを向く。→>
4 長内 あ@h◇((鼻で笑う))
@微笑み→>
土屋 ◇長内
5 齋藤 ひ◇%
土屋 ◇齋藤(素早く向く)→
長内 %齋藤→
6 (0.4)
7 土屋 あ&
齋藤 &顔に本を近づけにおいをおいを嗅ぐ→
8 (0.2)
9 長内 %hh◆hh&.h
%PC→>
土屋 ◆微笑み→
齋藤 &本をやや離し再び顔に本を素早く近づけにおいをおいを嗅ぐ→
10 齋藤 &イケアだ
&顔から本を離す
(0.2)◇(0.3)
11 土屋 ◇本→>
12 土屋 イ[ケ(h)ア] hh [h.h.h
13 白石 [ケア] h(0.2)[h
14 (0.3)◆
土屋 →◆
15 土屋 評価う()
16 齋藤 きょイケアという評価を”を下しました”<

齋藤は本をめくりながら、本に対して感動を示す(1行目)。齋藤が顔を下げ本への関与を高めると、それまで齋藤を見ていた白石は自身の手元にある本へ視線を移

す(2行目)。その後齋藤はページを開いた本に顔を近づけ本を嗅ぎ始める。本を嗅ぐ行為を保持してから、その約0.3秒後に長内は齋藤を見て、齋藤が本を嗅いでいるところを認識してから、一度外した視線を再度齋藤へ向ける。長内が2度目に齋藤へ視線を向けたとき、顔から本を離していた齋藤と視線が合う(3行目)。またこのとき白石は、姿勢を調整することで、参加者らと相互行為できる空間をつくりだす。長内は「あ」と発話し、何かがわかったことを表示すると微笑み、空気を吐くように鼻で笑いを産出する(4行目)。このとき、土屋は長内の発話に反応し視線を長内へと向ける。齋藤は「ひ」と発話し、反応を返すと微笑み始め、土屋と長内は齋藤へ視線を向ける(5行目)。0.4秒の沈黙のあと、土屋は「あ」と発話し、齋藤の様子から何かがわかったことを表示すると、齋藤は再び本を嗅ぎ出す(7行目)。0.2秒後、長内は視線をPCに向け、大きく笑いを産出させており、土屋は微笑む(9行目)。齋藤は9行目で再び嗅ぎ直すと、10行目で本のにおいを特徴づける。その後土屋と白石は笑いながら、齋藤の発話を受け止めたことを示す(12,13行目)。0.3秒の沈黙の後、土屋は齋藤の発話と本を嗅ぐ行為の関係に言及することで、齋藤の行為を十分に理解できる知識と経験があることを表示する(15行目)。齋藤は土屋の発話を再利用しながら、一連の自分の行為を理解可能にする説明を与える(16行目)。

事例1では、会話をしていない状態から会話状態へと移行するとき、まず共同注意(大藪, 2019)によって相互志向性が確かめられていた。長内と齋藤は視線が合う(3行目)ことで、自分は相手に見られているということ、そして相手は自分に見られているということを理解していることを、互いに確かめ合っていた。その後長内の発話と笑い(4行目)をきっかけに、会話が続くが、長内は再び齋藤を見る(5行目)ことで、互いの相互志向性が確かなものであるかを確認している。

長内と土屋は同じやり方(「あ」)で、齋藤の行為は習慣の本嗅ぎであるとわかったことを示している。このとき何をわかったのかは説明されないが、参加者らのあいだでは相互行為上の理解の困難として扱われていない。これは、齋藤の本を嗅ぐ行為が習慣で、すでに見たことがあるという知識や経験があるからである。

3.2 事例2

2023年9月27日に収録された、齋藤・白石・長内と他の研究室に所属する同期学生の若浜、同じ研究室に所属する一学年後輩の金野との相互行為場面である。事例2の笑いうる出来事は、齋藤の本を嗅ぐ習慣を真

似する長内の行為である。

1 長内 %0(0.2)
%齋藤→
@本を胸の高さに上げる→
>>PC→
齋藤 2 長内 >これく@*るいよ+
@本を左右に回しながら8回ふる
白石 *長内
齋藤 +本
3 (0.5)
4 齋藤 +んまじ+
+長内→+
5 長内 @う+:@ん%
@わずかに顔く
@本を両手で持つ
%本→
齋藤 +PC→>>
6 @ (2.2)\$ (2.0)@ (1.5)@ (0.5)
長内 @本を開き顔を近づけて嗅ぐ
@別のページを開く(視線は齋藤と白石の順に0.6秒ずつ)
@顔に本を近づけ匂いを嗅ぐ→
白石 \$笑みを浮かべる
7 白石 hh@◇めっちゃ(嗅ぐ)△じゃん
長内 @笑みを浮かべる
若浜 →◇長内
金野 △長内→
8 (0.2)
9 長内 @%ち[がう@違う△違う[し◇@違うって△俺じゃ[ないもん
10 白石 [hhh [L hhhh
11 若浜 [出た((微笑み)) [本の
長内 @顔から本を離す
@左腕をのばしながら、左手の人差し指で齋藤を指さす
(右手で本を持つ。この時本が閉じる)
@伸ばしていた腕と指を少し下げ→
%齋藤→ %白石→
若浜 ◇手元→>>
金野 △PC→>> △長内→>>
12 長内 @いいつも「嗅いでるから@:%
13 若浜 [またやってる
14 白石 [(そだよね)う:ん=
長内 @齋藤を指さす @本を開く→>>
%本→>>
15 長内 =そう
16 金野 > hh° <((鼻で笑う))

長内は本を振り指示代名詞を用いて本の特徴を報告する(1, 2行目)。このとき、長内は視線によって発話の宛先を齋藤にしているが、齋藤は自身のPCに視線を向けている。白石は長内に視線を向ける。その後齋藤は、長内へと視線を向け、長内の発話を受け止めたことを示し(4行目)、長内は最小限の受け止めを返すことで連鎖を閉じる(5行目)。6.2秒の沈黙のなか、長内は本を嗅ぐ準備を始め、嗅ぐ(6行目)。白石は、本を嗅ぐ長内を見て笑みを浮かべる。長内は別のページを開くと、齋藤と白石に視線を向け、その後再び本を嗅ぐ。この2度目の行為に対して白石は、笑いを産出し、続けて自身の笑いを理解可能にする発話を産出する(7行目)。この笑いに反応し、若浜は視線を長内へ向け、金野は白石の発話を聞き、視線を長内へと向ける。顔に本を近づけていた長内であるが、この産出された笑いが自分に宛てられたものであることを認識していることが、このとき笑みを浮かべていることからわかる。0.2秒の切れ目が生じ、長内は、白石の笑いの対象である本を嗅ぐ行為は、長内が独自に始めたのではなく、齋藤が普段から行なう行為であることを主張する(9行目)。白石は、長内の弁明に笑いで反応する(10行目)。このとき若浜は、微笑みながらこの行為に対して知識があることを示す(11行目)。金野は一時的にPCに視線を向け、再び長内へと視線を移す。その後長内は、行為の著作者が齋藤であ

ることを、齋藤を指差しながら強く主張する(12行目)。若浜は過去にその行為を見た経験があることがわかる反応を示し(13行目)、白石は長内の主張に理解を示す(14行目)。この反応から白石は、齋藤の本を嗅ぐ習性を知っており、長内の行為はこの習性の真似であると理解しているということがわかる。長内は、白石の理解に即座に反応し、同調する(15行目)。金野は、本を嗅ぐ長内の行為が、齋藤の真似で、ある種の遊びとして構成されていると理解可能になると、笑いを産出する(16行目)。

事例2では、事例1と同じように長内と白石の間で共同注意が達成され(6行目)相互志向性が確かめられていた。その後、白石の産出した笑いをきっかけに会話が発展される。本を嗅ぐ行為に対して知識や見た経験のある白石や若浜が笑いや微笑みを浮かべるなか(7~11行目)、金野は長内を見ているが笑いや微笑みは見られない。しかし、長内の行為が齋藤の真似であることがわかると(12~15行目)、ようやく笑いを産出する(16行目)。このことから、知識や経験が無い金野は、周りの参加者が笑っていたとしても、笑うことは控え、長内の行為がある種の遊びであることが明らかになると、笑いを産出することができたといえる。

3.3 事例3

2025年5月15日に収録された、齋藤と長内の相互行為場面である。事例3の笑いうる出来



図1 スカイウォーク

事は、校内の4階の中空を貫く通路(スカイウォーク)(図1)を通る学生が走っていたという出来事である。

長内は通路を注視し、一時的にPCに目を向けて、再び通路に視線を向ける(1行目)。長内は鼻で笑いを産出すると(2行目)、齋藤は姿勢と表情で自身の関与を調整する(3行目)。そして、齋藤は長内に笑った理由を尋ねる(4行目)。0.9秒の切れ目が生じたのち、長内は指さしを行ないながら笑いうる出来事を説明する(6行目)。齋藤は微笑み、顔をあげ通路を見渡す(7行目)。そして齋藤は実際に人物を目撃したのか問い(8行目)、長内は答える(10行目)。齋藤は続けて、その回答を受け止める(11行目)。12行目の長内の発話は、聞き取りが不可能である。このとき齋藤は視線をPCに向ける。齋藤はPCの時計に視線を向けたのち(13行目)、走っている学生の行為の合理性を見出したことを説明しながら、長内へ視線を向ける(14行目)。長内は、時間が伝えられた位置で、通路からスマホへと顔を向ける。齋藤は視線をPCへ戻し、長内はスマホを見る(15行目)。長内は齋藤による学生の行為の合理性の説明を受け止め、理解し

1 長内 % (12.9) % (1.6) % (0.6)
%スカイウォーク
%PC—%スカイウォーク—>
齋藤 >>PC—>
2 長内 ° ° h ° ((鼻で笑う))
3 齋藤 (1.3) & (0.6) & (2.3) & (1.2)
&上体がごくわずかに起きる
&微笑む
&真顔—>
4 齋藤 ° どした°
5 (0.9)
6 長内 hめっちゃ走ってるやつがいて
@右腕を肘が肩の位置になるまで持ち上げ、
スカイウォークを指さしながら、左から右に手を動かす
7 (.) && (0.2) + (0.5)
齋藤 &微笑み—>>
&顔をあげる—>
+4 階の通路(スカイウォークやその他)—>
8 齋藤 あ物理的に?
9 (.)
10 長内 @うん物理的に=
@ごくわずかに頷く
11 齋藤 =あ↑そうなんだ
12 長内 (&+)
齋藤 &PC—>
+PC—>
13 (0.4) & (0.6)
齋藤 &PCの時計—>
14 齋藤 あと4ふん&だ+か@%らね?
&長内のほうに顔をむける—>
+長内
@スマホ—>
長内 —>%
15 (0.2) &+ (0.2) %
齋藤 &顔を元(PC)に戻す
+PC—>>
長内 %スマホ—>
16 長内 #あ::#% そっか°
%スカイウォーク—>>
17 (0.4)
18 齋藤 ° ° う:ん°

たことを示す(16 行目)。視線は通路に向ける。その後0.4 秒の切れ目が生じ、齋藤は最小限の受け止めを産出し連鎖を完了する(18 行目)。

事例3 では、事例1, 2 とは異なり、共同注意がなされていない状況で笑いが産出され、会話が展開されていく。この状況では、笑いうる出来事を理解するため参照された、齋藤と長内のあいだの共在経験はないが、この大学の学生同士であるという関係性は用いられている。この大学の日常に関する、普段走っている学生はいないという知識を前提にして、この知識とは異なる状況であることから笑いうる出来事を見出していた。

3.4 事例分析のまとめ

事例1, 2 では、会話がなされていない状態で共同注意によって互いの相互志向性が確認されてから、産出される発話や笑いによって、相互行為が展開されていた。この2 事例の笑いうる出来事は、どちらも齋藤の本を嗅ぐ習慣にまつわるものであった。この行為を齋藤の習慣として理解できる知識や経験のない参加者は、その行為が行なわれている意図を理解してから笑いを産出させていた。一方で知識や経験のある参加者は、その行為を理解したことを発話や即座に産出させる笑いによって表示していた。

事例3 では、会話がなされていない状態から産出された笑いをきっかけに、相互行為を展開していた。この

とき、長内が笑いうる出来事として理解した出来事的前提には、大学の日常に関する知識が利用されていた。その前提から逸脱した行為が笑いうる出来事として見出された。このように、笑いうる出来事が、ある基準となる前提から逸脱していることによって見出されるときは、参加者らのあいだで過去に共有した固有の知識や経験を必要としていなかったと考えられる。

4. 考察

笑いは共有された知識、日常的前提からの逸脱性を通じて見出され、参加者間の関係性や相互志向性とともに組織されていることが明らかとなった。事例1 で長内は2 度笑いを産出している。はじめは、鼻で笑う方法である。このとき長内と齋藤は視線を合わせることで共同注意は達成しているものの、齋藤との相互行為が、今まさいに行なわれていることはまだ確かめられていない。2 度目は声に出して笑う方法である。これは、長内の発話と笑いに齋藤が反応したあとに産出されている。このことから、相互志向性に不確かさが残っている場合には、鼻で笑う可能性があると考えられる。事例3 も同様である。

しかし事例2 では、はじめから声に出して笑う方法が採られている。今後は、相互志向性の確実性や物理的距離、笑いうる出来事の性質といったどのような要因の違いが相互行為過程に影響を及ぼしているのかについて検討していく必要がある。

文献

Glenn, P. (2003). *Laughter in Interaction*, New York : Cambridge University Press.

Goffman, E. (1961). *Encounters*, The Bobbs-Merrill. =1985 佐藤; 折原訳『出会い』誠信書房

Jefferson, G. (1978). *A Technique for Inviting Laughter and Its Subsequent Acceptance Declination*, in G. Psathas(ed.) , *Everyday Language*, Irvington, pp. 79-96.

串田秀也・平本毅・林誠 (2017). *会話分析入門* 勁草書房

大藪泰 (2019) 共同注意という子育て環境, 総合人文科学研究センター研究誌 WASEDA RILAS JOURNAL, 7, pp.85-103.

齋藤巴菜・坂井田瑠衣(2023). 共在状態における笑いの連鎖, 日本認知科学会第40 回大会発表論文集, 788-791.

Suchman, L.A. (1987). *Plans and Situated Actions : The Problem of Human-Machine Communication*, Cambridge University Press

高梨克也・坂井田瑠衣 (2022). 日常生活場面の相互行為分析, 鈴木宏昭. 認知科学講座3 心と社会 東京大学出版会